

〔提 言〕

## 教育とコラボレーション

家族ケア研究所

渡辺 裕子

本学会が設立されてから、すでに10年以上の歳月が流れた。設立当初は、「家族看護」という言葉すら広く認知されているとは言えず、「家族看護って何ですか?」という質問の返答に窮する場面も多くあった。しかし時代は流れ、家族のケア機能がますます限界を抱える一方で、要介護者は増え続け、早期退院を迫られるなかで、施設内・外のナースらは、否応なく家族に関わらざるを得ない現実日々、格闘している。どのようにしたら、家族看護実践を豊かにすることができるのか、本学会に与えられた使命はその重要性を増すばかりである。筆者は、主に、現場のナースの教育やコンサルテーションに当たってきた立場から、今後、本学会が担うべき機能や方向性について述べてみたい。

ひとつは、教育的機能の強化である。学会が誕生して以来、毎年学術集会が開催され、演題数は増え続けている。家族看護に関する研究は、質・量ともに飛躍的に発展したと言っても過言ではないだろう。しかし、それらの知見が、看護実践に有効に活用されているかという点では、課題も多い。そもそも家族看護実践は、きわめて個別性に富んだ事例のその時々ニーズを的確に把握し、対象の状況に合わせた表現でそれに応えていかなければならない。断片的な知識の集積では太刀打ちできるものではなく、ナース

の柔軟な思考プロセスと豊かな表現力が必要とされる。研究として明らかにされたさまざまな知見を、いかにしたら実践に還元していくことができるのか、本学会には、ナースが家族を的確にアセスメントできる柔軟な思考能力と表現力を高める教育的機能が強く求められているのではないだろうか。

そして、ナースの思考能力や表現力を高めるためにも、他の専門性とのコラボレーションの強化を提案したい。「家族を支援する」という目的を同じくして発展してきた、家族療法や精神分析的アプローチ、ケースワークや心理教育的アプローチ、学校教育臨床などとのコラボレーションは、ナースの視野を拡げ、アプローチの幅を豊かにしてくれるであろう。また、広く他領域のアプローチを知ることによって、逆に看護職として自ら果たすべき役割、看護職としてのアイデンティティーが明確になるのではないだろうか。そして、「外から内をながめる」ことは、「家族看護学」の学問的基盤をより強固なものにするためにも大切なことだと感じている。

本学会が設立されてから10年余り。舞台は第一幕から第二幕へと転換しつつある。時代の流れをしっかりと見極めつつ、学会員のニーズに応じた柔軟な機能を果たせるよう、微力ながら力を尽くしていきたいと考えている。